

書評

青野敏博, 苛原 稔 (編)

産婦人科外来処方マニュアル (第4版)

評：水沼英樹 (弘前大学医学部教授・産科婦人科学教室)

『産婦人科外来処方マニュアル第4版』が発刊された。産婦人科の泰斗である青野敏博徳島大学名誉教授と、その青野先生の薫陶を受け、また評者の友人として親しくお付き合いいただいている徳島大学医学部産科婦人科の苛原稔教授が編者となって、徳島大学産科婦人科の現教室員やOBが総力を挙げて編集している処方マニュアルの改訂版である。

本書は、産婦人科の外来診療の中で日常的に遭遇する疾患に焦点を当て、その診断がついた段階で、どのように薬剤の選択を行うかを極めて明快かつ簡潔にまとめた一冊である。目の患者に対し、最も適切な薬剤が容易に選択できるよう、そのための工夫が随所に施された内容となっている。

まず、産婦人科外来で遭遇する疾患の診断名と使用頻度の高い薬物療法の計70項目を選出し、これらを1. 周産期, 2. 内分泌, 3. 不妊, 4. 感染症, 5. 腫瘍, 6. その他, の6群に分類し、1から70の通し番号をつけている。このため、本書の利用者は、疾患群から目的とする病名に容易に到達でき、さらに、その通し番号を指標とすることによって、いとも簡単に目的とする疾患の治療薬に到達できる。この通し番号の存在によって、従来の書籍にしばしばありがちであった、ページをめくり返すという煩わしさから完全に解放されることになった。

また、本書は、ミニマムリクワイアメントに徹

しており、その疾患の概略、疾患の治療目的、方針は極めて的確かつ簡潔にまとめられ、すぐに具体的な処方例が提示される。しかも、各処方例の冒頭には、「〇〇の場合」と、その処方を選択する場合の要件が付けられているので、本書の利用者は、迷うことなく目の患者に対して最も適切な薬物の選択が可能となる。続いて、なぜその処方を行うかの医学的根拠と薬剤の副作用を含めた必要最低限の説明が「処方の解説」「薬剤の解説」として付けられているので、その薬剤の選択に關してのインフォームドコンセント取得にも十分役立つような配慮がなされている。さらに、付録としてステロイドホルモン、抗生物質の一覧表や主な剤形番号一覧表、そして産婦人科外来で使用する主な薬剤の警告集が掲載されているのも便利である。

産科婦人科学は周産期医学、生殖医学、腫瘍学、女性医学の4つの専門分野を領するが、本書はどの分野をも網羅しているの、専門領域に關係なく外来診療に携るすべての産婦人科医にとって利便性が高くかつ教育的なマニュアルとなっている。さらに、ポケットに納まるサイズであるため、忙しく院内を駆け回る研修医にとっては必携の書として推薦できる一冊である。

●B6変 頁232

定価3,360円(本体3,200円+税5%) 2013年
[ISBN978-4-260-01749-7] 医学書院 刊